

Close Up

クローズアップ 福祉安全運転

中国地方の作業療法士の有志が連携し、
運転復帰支援の輪を広げる

Honda は高次脳機能障がい等で身体が不自由になった方の運転復帰を支援するため、運転能力を評価・訓練するプログラム※を提供している。さらに、これを全国に広げることがめざし、病院施設との連携を進めている。今回は広島県、山口県、島根県、岡山県の病院の作業療法士の有志が立ち上げた中国Dプロジェクトの活動を紹介する。

運転支援に対する考え方
手法を共有できる場づくり

医療現場においては、高次脳機能障がい等で身体が不自由になった方がリハビリテーションを経て運転を再開しようとする際に、担当の医師や作業療法士がその判断に苦慮している現状がある。これを解決するため、Honda は地域における運転復帰支援（以下、運転支援）プロセスの構築をサポートしている。その第一歩として、2014年に四国地方の病院やリハビリテーションセンターと連携し、四国運転リハプロジェクト（以下、四国プロジェクト）を立ち上げた。

四国プロジェクトでは、メンバーとなった作業療法士の方々が運転能力の評価方法の開発に取り組んだ。そして2016年、地域性や病院施設の規模にかかわらず実施できる手法として、停止車両評価（下記参照）を考案。これを組み込んだ評価方法を「自動車運転再開ガイドブック」にまとめ、四国地方の病院などへの普及を進めた。

その後、全国に同様の活動を展開するため、四国プロジェクトのプロジェクトリーダー岩佐英志さん（合同会社ラシエイド 代表 認定作業療法士）を中心に、日本運転リハプロジェクトが発足。その活動の中から、中国Dプロジェクトは誕生した。発起人は、翠清会梶川病院（広島県）の森松千夏さん（認定作業療法士・公認心理師）。「作業療法士として患者様の運転支援をする中で、もっと自分にできることがあるのではないかと感じていた時、Hondaを通じて四国プロジェクトの会議に参加する機会をいただきました。地域や職場の枠を超え、メンバーの方々が同じ目的に向かって自由闊達に議論する様子は、私が理想とするものだったので。中国地方で同じ志の仲間を集めて、お互いに運転支援についての考え方や手法を共有したり、困りごとを相談できる場をつくらうと思いました」と振り返る。

森松さんが、これまで研修で知り合った他県の作業療法士に声をかけるなど、メンバーを募ると、山口リハビリテーション病院（山口県）の田中伸二さん（認定作業療法士）、公立邑智病院（島根県）の山田寛之さん、

津山中央病院（岡山県）の柿元翔太さんが呼びかけに応えた。

3名は「森松さんが声を上げてくれたので、その想いを形にできるように協力したいと思いました」、「地域を超えて作業療法士同士つながりたいと考えていましたから、断る理由はありませんでした」、「自分も森松さんと同様、運転支援について相談できる人がまわりにいなかったため、メンバーに加えてほしいと思いました」という。

森松さんを含めた4名は、2021年3月に中国Dプロジェクトを発足。Dには「Dream（夢）」「Drive（運転）」に加えて「Direct（ダイレクト）」という意味がある。作業療法士がダイレクトにつながり、患者に対してダイレクトに役立つアイデアを生み出したいという想いが込められているのだ。

運営には、日本運転リハプロジェクトのプロジェクトリーダーを務める岩佐さんが協力。Hondaも活動をサポートしている。

若い作業療法士に
考え方を考えてもらう

森松さんらは、このプロジェクトを通じ、運転支援について自分の言葉で患者様に説明ができる作業療法士を育てていきたいと考えた。そのため、キャリアの浅い作業療法士や、運転能力の評価を始めて間もなかったり、これから始めようとしている作業療法士を対象とした研修会を企画し、2021年度は3回開催（すべてリモート）。「事例による運転支援を考える」をテーマとした。第1回（6月）の研修会には新人の作業療法士を中心に16名が受講した。第2回（10月）は「運転評価の常識を疑う」、第3回（1月）は「新たな手法を知る」がテーマとなった。第3回には、四国プロジェクトが考案した停止車両評価の実践例が紹介された。「まだまだ運転支援は難しいというイメージがあります。だから、それを払拭して敷居を下げたいと思いました。運転能力評価に対する考え方を考えてもらうための第1回は大きな反響がありました」と森松さん。「運転支援の形はいろいろあると思いますが、『その検査は運転能力の何を評価している



森松千夏さん（翠清会梶川病院）



田中伸二さん（山口リハビリテーション病院）



山田寛之さん（公立邑智病院）



柿元翔太さん（津山中央病院）



鈴川大騎さん（翠清会梶川病院）



岩佐英志さん（合同会社ラシエイド）

か』『どんな能力があったら運転できるのか、それを患者様に説明できるか』受講者に問いかけると、黙り込んでしまいました。これが私たちのねらいで、一人ひとりに何らかの気づきがあったはずだ。

3回の研修会をすべて受講した鈴川大騎さんは昨年、森松さんがいる翠清会梶川病院に作業療法士として入職した。「まだ新人だったので、運転支援について考える余裕はありませんでした。しかし、患者様の中にはクルマが運転できないと生活が成り立たない方もいます。評価や支援の方法を一から学んでおく必要があると思い、参加しました。単に知識やノウハウを学ぶのではなく、運転支援に対する自分なりの考え方を整理することができ、今は自信を持って患者様に向き合っています」と受講した感想を語る。

昨年度の研修会では四国プロジェクトが考案した停止車両評価が紹介され、鈴川さんは必要だと思う患者様に実施しているそうだ。「患者様のクルマを家族の方に病院まで運転していただき、停止車両評価を行いました。停止状態ですが、実車でやることで患者様の納得度も高いようです。運転能力があれば、できるだけ運転できるようにしてあげたいと思います。だからこそ、しっかり評価する必要があります」。

森松さんは「自分で考え、患者様に必要な検査や評価ができるようになってうれしい」と後輩である鈴川さんの成長に目を細める。山田さんは「若い方には型にはまるのではなく、多様な視点を持って患者様を支援してほしいと考えています。私たちは、鈴川さんのような作業療法士をどんどん育てたいと思っています」という。

患者様にいきいきと
生活してもらうために

研修会はプロジェクトのメンバーにも刺激になったという。田中さんは「経験者にとっても基本に立ち戻れる内容でした。自分たちは患者様の何を見て、患者様にどのような説明をしなければならないか、考える機会

が必要だと感じました。研修会の企画・運営に携わってメンバーの考え方を聞いたり、講師として受講者と触れ合うことはたいへん勉強になります」と語る。

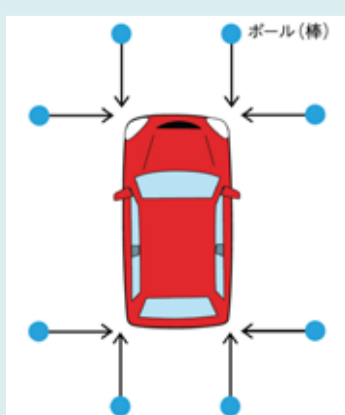
また、同僚にも受講してもらったという柿元さんは職場にも波及効果があったと話す。「机上検査から得られた結果だけを見て話し合うことが目標になっていたことに、若い作業療法士が気づいてくれたようです。日常生活の中での兆候を見ながら、停止車両評価をはじめとする様々な評価を複合させ、仮説を立てて進めるようになりました。運転能力に限らず臨床場面での評価全般に対する見方も変わり、患者様に意味のある説明ができるようになったと感じています」。四国プロジェクトのプロジェクトリーダー岩佐さんは「中国Dプロジェクトは若い作業療法士を巻き込んでいるところが特徴的です。患者様のために、地域や職場の垣根を取り払って自由に議論するという、私たちが培ったノウハウが全国に広がっていることはとてもうれしく思います」と森松さんらの活動を評価する。

中国Dプロジェクトの研修会は2022年度も3回シリーズで開催される予定だ（第1回は7月に実施）。これと並行して、昨年度の受講者が研修会で得た成果を職場でどのように活かしているかをアウトプットして共有できる機会を用意しようと計画している。若い世代に自分と同じキャリアの作業療法士が運転支援にどのように取り組んでいるのかを知ってもらうことで、刺激を受けてほしいという考えだ。

「患者様が安心して人とつながって、いきいきと生活できるように支援することは作業療法士の根本であり、そのための運転支援です。目的があるから移動したいと思うし、移動できるから人とつながることができません。実効性のある運転支援ができるように、これからも人と場をつなぐ活動を継続したいと思います」と森松さんはいふ。日本運転リハプロジェクトによって、全国へ運転支援の輪がさらに広がっていくことが期待される。

●停止車両評価について●

患者に停止状態のクルマの運転席に座ってもらい、運転に必要なとされる能力を評価するもの。クルマへの自力での乗降、運転姿勢と姿勢保持、ハンドルやブレーキの操作力といった身体機能だけでなく、視野や距離感覚、位置感覚等の高次脳機能を確認する。例えば、車両感覚を評価する時は目印になるようなポール（棒）を停止車両の前後左右の8つの方向から近づけ、車体の前方および後方の右端・左端にポールが来たと認識したら手を上げてもらう。これを2回実施し、「目安値を大きく外れていないか」「左右で差が顕著に見られないか」などをチェックする。



※ Honda の運転復帰プログラムの詳細については以下のホームページ参照。
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/rehabilitation/>

